

「生活者」の視点から描く
竹富島における観光の位置付けと選択的利用

多文化・国際協力学科 鷺田舞綺

1960年以降、観光は交通網の発達に伴い、世界的な産業へと進化を遂げていった。観光による経済的な利益の大きさと他産業を巻き込んだ地域発展が見込めることから貧困地域である辺境地の開発手段として観光が選択されるようになった。その際、主としてマストゥリズムを前提とした地域外の企業による外来型観光開発が用いられた。しかし1980年代に入ると行き過ぎた近代化の弊害として環境問題や地域間格差が指摘されるようになり、外来型観光開発に代替して、オルタナティブツーリズムの実現を目指した内発的観光開発が提唱され始めた。内発的観光開発では、地域住民が主体となって地域固有の諸文化を観光資源として発信することによって、地域経済の発展と住民の地域に対する誇りの獲得・向上が期待できるとされている。しかしながら、その議論の中で主体とされるべき住民の生活と観光の関わりについてはあまり言及されてこなかった。そこで、本稿では地域住民を「生活者」として捉えなおし、地域において観光がどのように解釈され、実践されているのかを考察することを目的とする。その際に、住民の生活の立場に立ち、住民の生活保全が地域の環境を保護する上で重要であるとする「生活環境主義」の考え方や生活空間再生論における生活の場という概念を取り入れる。

調査は沖縄県の竹富島で実施した。竹富島は、八重山郡竹富町に属する面積5km²、外周9kmほどの有人島で沖縄屈指の観光地として知られている。2021年8月から2023年8月までの間に3度フィールドワークを実施し、島民や宿泊客への聞き取り調査や参与観察を行なった。その結果、竹富島の観光の変遷について以下のことが明らかになった。1970年頃の島外資本による土地買収に始まり、1980年代には再び島外資本によって竹富島の土地開発が進められるといった状況に対して、島民のなかから土地保全の運動が始まり、それが現在も残る竹富島憲章の制定に繋がった。また、竹富島における観光は、竹富島に「人が来た」から始まったのであり、地域発展の手段として観光を取り入れたわけではなかった。さらに、「生活者」としての島民の生活を分析すると、島民たちは観光に従事しながらも島の運営や祭事行事への参加を重視し、選択的にそれらを利用していた。また、祭事行事は観光とは異なるものだとして、観光資源にしない選択をとっていることが明らかになった。

島民自らが中心となって守ってきた伝統的な竹富島の町並みが、現在では竹富島の主要な観光資源となっている。このような点から竹富島における観光の発展には内発的観光開発の側面が見られる。その一方で、観光地として収入を得る場と島民の生活の場が重複し、観光に依存した地域形成が容易である状況下において、島民が観光と島の運営や祭事行事とを意識的に取舍選択しながらどちらにも偏ることのない生活様式を構築している。その背景には神事と人事は異なるものとして島民の多くが捉えているように、祭事行事だけではなく祭祀を基盤とする島の運営を含めた島での暮らしが観光とは異なるものとして認識されていることが示唆される。これらは、竹富島を観光の場としてではなく「生活の場」として捉え、島民を「生活者」として見たからこそ明らかになったと言えよう。以上のことから、本稿は、観光開発の主体であるべき住民という視点だけでは不十分であった議論に、「生活者」としての住民と観光の関わりを視野に入れる議論の重要性を見出した。(1415文字)